

## 成功のための構造化

――自閉症の生徒のいる就学前クラスや小学校クラスの

ための〈グループ〉についてのアイディア――

幸田 有史, 門 眞一郎 訳

### I. 〈グループの重層化〉

数学的に言うと、〈最小公分母〉から始めるということを忘れないように。〈グループ・タイム〉は、クラス全体の集まり（ホームルーム）から、始めることがあります。グループ活動が進むにつれて、グループ活動は、言語を必要とすることが多くなり、具体性が減っていくようになります。自閉症の生徒については、その子の発達レベルと言語レベルに応じた活動の場合だけ、グループにとどまることを期待すべきです。まずそういう活動から始めてください。〈グループ・タイム〉は、実際には、1、2のあるいは3つのグループからなります。例えば、朝の歌の時間の後で、グループには短時間しか関わることができない子どもについては、次の活動に移るように指示します。この時間は、その生徒が自立ワーク（勉強や作業）に取り組むには格好の時間となります。次のレベルのグループ活動として、カレンダーや天気などについての活動があります。その後で、同様に、自立ワークに取り組む子どももいます。もっと抽象的で、言語に重点を置く活動のグループに残れる子どもたちは、言語スキルや会話スキルのレベルがもっと高い子どもたちです。

- ・音楽にあわせ元気で歌を歌う、いつもの（ルーティン）活動、  
数える、など。具体物＝取り扱える物（全員）
- ・カレンダー、天気など。（小グループ）
- ・会話、より高度の言語スキル。（最小グループ）

自閉症の生徒がグループ・タイムにうまく参加するための構造化についてのアイディア

A) 自閉症の生徒にベルを鳴らさせて、みんなをグループタイムに〈呼び集め〉ることで、グループに参加するというルーティンを教える。または、・・・

B) 自閉症の生徒に、その子が好きな歌に関係する物（〈バスを運転する〉という歌の時には、おもちゃのバス）を手渡す。これは、最初の歌の間に持っていたり遊んだりする物として使われるが、同時に、グループへの移行物（トランジット・オブジェクト）としても利用できる。待つことができない生徒の場合、その子が席に着いたらすぐにその子の大好きな歌を（テープやレコードで）始める。

C) 元気が出る、しかも繰り返しの多い歌で自閉症の生徒が知っており好んでいるものを加えておく。歌われる歌ごとに、その歌に関係のある物をその子に持たせる。毎日同じ歌を歌う習慣にして、子どもに何を期待しているのかが分かるようにすれば、子どもは落ち着けるし、予測す

ることができ、グループ活動を楽しむことができるようになる。

D) 歌詞を紙に書いて示す。自閉症の子どもでは、書かれた文字やことばに興味を示すものが多い。これらの文字を<読む>ことで、グループ活動の時間に興味を覚えて留まりやすくなる。

E) 歌うときには、その歌に応じた物や絵（写真）や文字カードや歌詞と共に歌うこと。歌のライブラリーは箱やフォルダーにして、レコードやテープと共に、子どもに手渡す視覚的の手がかりも一緒に保管するとよい。

F) 歌が終われば、グループ活動の時間の第1部の終了である。子どもを、自立ワークのエリアに送り出し、自立課題として構造化された楽しい活動に取り組みさせる。グループ活動の時間をすごすことと、グループ活動の時間を終えることが、両方とも肯定的な体験となるようにする。子どもが欲求不満におちいたり混乱したりする<前に>グループから離す。最初は、グループ活動の時間は短ければ短いほど良い。また、部屋の中をうろうろしたくならいつでもできる、というようにしてはいけない。次にその子の一日のスケジュールの重要な部分となる特定の活動の時間とする。この時間は「自立ワーク」に最適な時間である。

G) 先のグループ活動は続くが、今度は言語レベルがもっと高度で、グループ活動に残る生徒に応じたものである。このグループは必要なだけ<重層的>にすることができる。助手は、自立ワークエリアに行った子ども、自由遊びのエリアにいる子ども、<構造化された遊びの時間>になった子どもを見守る。

H) 自閉症の生徒が、引き続きグループに参加する場合は、必ず続けて視覚的な手がかりを使うこと。物や絵（写真）や書字を使うこと。そして、決まった順序（ルーティン）で見通しが立つようにすること。

## Ⅱ. 「通常活動」のグループ

このグループでは従来型の<（療育）センター>でよく行われている活動を行います。ただし自閉症の生徒のことを考えて構造化の度合いを強くします。自閉症の生徒の自立を大いに促進できるように、活動を構造化しなければなりません。一方、同時に、対人関係場面でも通常活動ができるようにしておくべきです。以下に、いくつかの例を述べます。

### A) パズル・グループ

グループのテーブルの上にパズルをいくつか置く。パズルは自立ワーク・セッションで提示する。パズルのピースはパズルの枠と一緒に箱の中に置く。<おしまい箱>をテーブルの端に置く。パズルがすべて<おしまい箱>に入ったら、そのグループの時間は終了する。そのテーブルのぐるりで、同時に数人がワークに取り組むことができる。

### B) ブロック（Duplo）・グループ

テーブルの上に、ブロック活動の小さなバスケットや靴の箱をいくつか置く。それぞれの箱には、ブロック片に応じたピクチャー・ジグを1つあるいはいくつか入れておく。いろいろなモデルをたくさん作れるように様々なジグを用意しておく。<ブロック・グループ>の子どもは箱を選び、ジグを手がかりに、完成したモデルをテーブルの端の<おしまい箱>に入れる。もし年長

で高度のスキルのある生徒に、もっと＜創造的なスキル＞を使ってワークをさせたいなら、その生徒に他の生徒用のジグを考案し描くように教える。

#### C) ペグボード（棒さし盤）・グループ

いろいろなパターンのペグボードをいくつか箱の中に入れておく。あとは上記のグループと同じ。

D) その他のグループ：Lotto のグループや、Tinker Toy のグループなど。

### Ⅲ. ＜活動共有＞のグループ

このグループは、より高度の対人関係能力を必要とするという点を除けば、上に述べた通常活動グループと似ています。似てはいますが、ひとりで活動に取り組む代わりに、このグループでは2人（または、それ以上）の子どもを同じ活動に取り組ませます。子どもたちは、交互にやるわけではありません。同一のパズルやペグボードを一緒に完成させていきます。教材は2人以上の子どもが取り組めるよう、十分大きくなければなりません。たとえば大型のパズルや大型のペグボードです。自閉症の子どもをこの種の活動共有に誘うにあたっては、子どもは既にその活動を一人でやりこなせるようになっているということが、非常に大切です。他児と一緒にワークに取り組むという要素が加わりますが、これは実のところ子どもにまったく新しいスキルを教えることとなります。自閉症の幼児の多くにとっては、この種のグループ活動は難しいので、段階的に少しずつ始めましょう。

### Ⅳ. あなた方のアイデア

もしグループについてのアイデアが発達レベルに相応しているなら、そのアイデアは自閉症の生徒にも合います。構造化による教育の基本原則を忘れず、しかもそれを＜視覚的＞にすることも忘れないように。自閉症の子どもが、自分に期待されていることは何かということをよく理解できるようにするために、自閉症の子どもの目を見て、活動を構造化すること。あなたが担当しているグループでは見通しが立つように一定の順序（ルーティン）に従うこと。